

第3章 平宗盛・清宗の墓伝承地の調査

- ・調査日 平成25年12月16日
- ・所在地 野洲市大篠原字正法寺105番地1

1、調査

伝承地は、中山道を山裾に南へ沿って、95 mほど下がった山裾の平坦面に位置する。配置は、山に向かって右側に阿弥陀如来坐像、左側に板石を並列している。

墓は、阿弥陀如来坐像である。花崗岩に彫られたもので、表面が剥落している。光背に文様はない。高さ97cm×幅60cm、厚さ62cmを測る。背面は加工がない。

板石は、高さ62cm×幅49cm、厚さ30cmを測る。石材は花崗岩製である。この墓は父子を供養したという塚が残る。

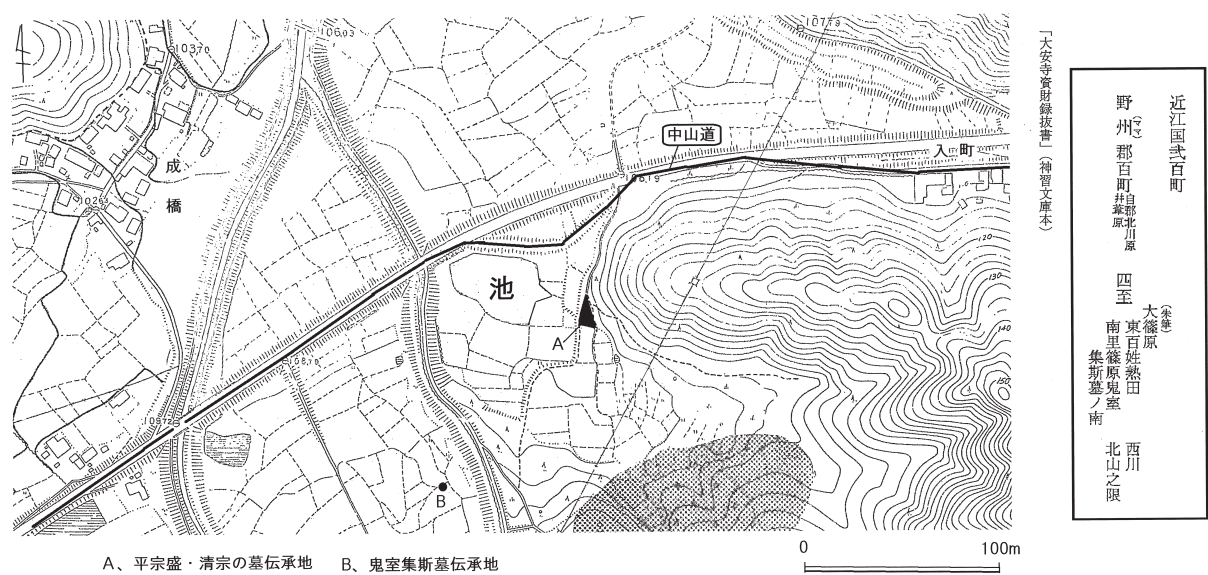
2、史料

『吾妻鏡』・『平家物語』・『源平盛衰記』・『近江輿地志略』・『木曾路名所図会』に記事一覧表の記述があるが、吾妻鏡に「篠原宿で橋馬充公長 誅前内府」とあり、平家物語・源平盛衰記でも殺害の記事がある。いずれにしろ、篠原宿に近い現在地も有力な候補地であるが、詳細な位置を示す記事はない。位置を示したのは、江戸時代中期の近江輿地志略の「平宗盛塚・平清宗塚」の項で中山道沿い不埒池付近とされ、木曾路名所図会で挿絵があり、この位置に伝承が生まれる。中山道沿いにあり、江戸時代後期以降に知られることになる。阿弥陀如来坐像の石仏も江戸時代のものだろうか。

地籍図を見ると、木曾路名所図会の中山道が成橋から南側に湾曲し、鏡宿に向かう。蛙不鳴池は、中山道が堤の堤防となり、その上を歩く。平宗盛塚・平清宗塚は、里道を南に下がり、首洗池の北側から塚への道が描かれる。昭和時代までその景観は、余り変わっていなかった。

3、篠原宿

平安末期から中世にかけて、東山道に置かれた宿場である。『源平盛衰記』によると、元暦二年(1185)に壇ノ浦の合戦で捕虜となった平宗盛・平清宗親子は、源義経に伴われ鎌倉へ護送される途中に野洲川を渡り、篠原堤・成橋を通過し、鏡宿に着いている。帰路に6月21日に篠原宿に着き、斬首される。篠原宿は、街道遺跡と呼ばれ、この時期の遺構群が知られる。『東関紀行』によれば、仁治三年(1242)8月には「篠原という所を見れば、西東へ遙に長き堤あり」と記し、「都をちつ旅人、この宿にこそ泊まりけるが、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ」し、「行く人もとまらぬ里となりより荒れるのみまさる野路の篠原」と詠んでいる。野路については、草津市野路に同地名もあり、こちらとする意見もある。



平宗盛・清宗墓の伝承地位置図

篠原宿関係記事の一覧

| 元 号 | 西 暦 | 史 料 | 内 容 |
|------------|------|------------|--|
| 元暦元年 | 1184 | 近江国注進風土記 | 篠原堤 |
| 元暦 2 年 | 1185 | 源平盛衰記巻 45 | 壇ノ浦の会戦いで捕虜となった平宗盛・平清宗親子は、源義経に伴われ鎌倉へ護送される途中に野洲川を渡り、篠原堤・成橋を通過し、鏡宿に着いている。帰路に6月21日に篠原宿に着き、斬首される。篠原宿は、街道遺跡と呼ばれ、この時期の遺構群が知られる。 |
| 仁治 3 年 | 1242 | 東関紀行 | 「篠原という所を見れば、西東へ遙に長き堤あり」と記し、「都をちつ旅人、この宿にこそ泊まりけるが、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ」てし、「行く人もとまらぬ里となりより荒れるのみまさる野路の篠原」と詠んでいる。 |
| 建武 3 年 | 1336 | 太平記巻 17・37 | 6月、足利方の小笠原貞宗の軍が「野路・篠原」に布陣、9月に延暦寺衆徒五千人が押し寄せる。 |
| 正平 16 年 | 1361 | 太平記巻 17・37 | 12月に京極導誉の軍勢 700 騎が「野路・篠原」に留まり、土岐桔梗一揆勢と篠原宿で合流したという。 |
| 永享 10 年 | 1438 | 結城戦場物語 | 上杉憲美は関東に下向上、篠原に陣所を構えたという。 |
| 鎌倉時代 末期 | | 吾妻鏡（第 4 巻） | (文治元年) 「廿一日壬申。卯剋。廷尉着 近江篠原宿。令 橋馬充公長誅前内府。次至野路口。以堀弥太郎景光梟前右金吾清宗。」 |

平宗盛・清宗の関連記事

| 成立時期 | 西暦 | 史料 | 内容 |
|------------|------|-----------------|--|
| 延慶2年 以前 | 1309 | 平家物語 (巻第11) | <p>大臣殿被斬</p> <p>日数ふれば都もちかづきて、近江国篠原の宿につき給付ひぬ。判官なさけふかき人なれば、三日路より人を先だてて、善知識のために、大原の本性房湛豪という聖を請じ下されたり。昨日までは親子一所におはしけるを、今朝よりひきはなつて、別の所にすゑ奉りければ、「さては今日を最後にてあるやらん」と、いとど心ほそうぞ思はれける。大臣殿涙をはらはらとながいて、「そもそも右衛門督はいづくに候やらん。手を取りくんでも終り、たとひ頸はおつとも、むくろは一つ席にふさんところ思ひつるに、いきながらわかる事こそかなしけれ。一七年が間、一日片時もはなる事なし。海底に沈まで、うき名をながすも、あれゆゑなり」・「親子一つ穴にぞうづみける」</p> <p>【校注】</p> <p>平家物語の屋代本・長門本「六月廿日」、翌日殺されたとある。元和版・正節本「二十三日」に同日に殺される。『吾妻鏡』によると、6月21日、篠原着、まず宗盛を誅し、次に野路で清宗を斬ったとある。 (出典:市古貞次『源氏物語②』新編日本古典文学全集46 1994年)</p> |
| 鎌倉時代 | | 源平盛衰記 (第48巻) | <p>大臣親子自(二) 鎌倉(一) 上洛附女院寂光院入御事</p> <p>「大臣殿父子、本三位中将、鎌倉より還上給と聞せ給ければ誠ならず思召ければ、父子は、都近き近江国勢多と云う所にて失給ぬと聞けば、悲とも云ばかりなし。三位中将、奈良の大衆の中へ出されて、今は限の御有様、御頸は大卒都婆に釘付にせなれ給へる事、又大臣殿父子の御頸、大路を渡して獄門の木に被懸たる事、人参て再々と申ければ、由なく聞せつる者哉と思召」と記載される。</p> |
| 延文元年 以前 | 1356 | 保暦間記 (下巻) | <p>宗盛清宗被誅事大地震事 (文治元年)</p> <p>六月九日、大臣殿を相具しつゝ、已に上洛し給ひけり。本三位中将も今度上洛せらる。同廿一日、近江國篠原に著。同廿二日の朝より右衛門督を別の所にをき奉れば、今を限の命と互に思給ひつゝ、此十七年が程片時も離れざりつる物をとて歎給ふぞ哀なる。判官はさる人にて、大原の本性上人を請じて善知識となし、目出く教化申されけるに、則宗盛念佛をとなへ切られ給へば、右衛門督清宗も切れ給ひけり。同廿三日に宗盛父子の首を大路を渡して獄門に懸らるべしと義經宣ひければ、諸卿評定有て申されけるは、三公以上の首を渡して懸らるゝ事其例なし。就中此仁和寺先帝に近く仕へて萬機の政を司りし人の首を渡されん事いわれなしと申されけれ共、義經重て宣けるは、義朝が首を渡して懸られし上は當家の面目不可過之由を頻に仰られしかば、遂に獄門に懸られにけり。</p> |

| 元 号 | 西 暦 | 史 料 | 内 容 |
|-------------|------|---------------------------|--|
| 享保19年 編纂 | 1734 | 近江輿地 志略 (巻之 68) | <p>不帰池（かえらずのいけ） 同村鳴橋の東にあり。横一町半許、長二町許の池なり西東へ長し。東を夕日の岡といひ西を朝日の岡といふ。土俗之を斎藤斎盛が首洗池といふ者は大に非也。是平宗盛の首洗池といふを唱へ誤りたるなるべし。兵主の神日毎に三度つつ此池へ影向し給うて帰り給うを見ず故にかへらずの池といふと。或は云ふ神池にして蛙不住故に、蛙不入の池ともいふと。 平宗盛塚・同清宗塚 不帰池の上街道の傍田畔にあり。</p> |
| 文化2年 刊行 | 1805 | 木曾路名 所図会 乾 (その2) | <p>平宗盛墳 同首洗池 里民これを斎藤実盛の塚といふ この類多し。 平宗盛の塚 篠原のひがし鳴海橋の左にあり、宗盛卿は八島の合戦に捕れ鎌倉へ引かれ切腹を勧めたまえども、それも臆して存らへ、遂にここにて首を討たれたまう。 蛙不鳴池 （鳴海村にあり、この池を宗盛首洗池という。世俗これを斎藤別当実盛の首あらひ池といふ。加賀国篠原の名によりてここに訛り来るなるべし） 『玉葉』 志賀の浦や時雨て渡る浮雲に三上の山ぞ半ばかくる 読人 しらず三上山を見て野径をつたひ、小篠原てふ中へ出でて顧れば、比叡の山三ッの峯に見えて、富士の峴に似たり。三ッ坂を越えて砂川あり。右の方に、からかさ松とて傘に似たる古松あり。それより桜はざま・辻町むらを過ぎて矢棟川あり。矢のむね村には火うちの金をつくりて売る。小堤といふは、篠原堤なり。大篠原に産土神あり、また糰の名物なり。</p> |



平宗盛・清宗の墓伝承地



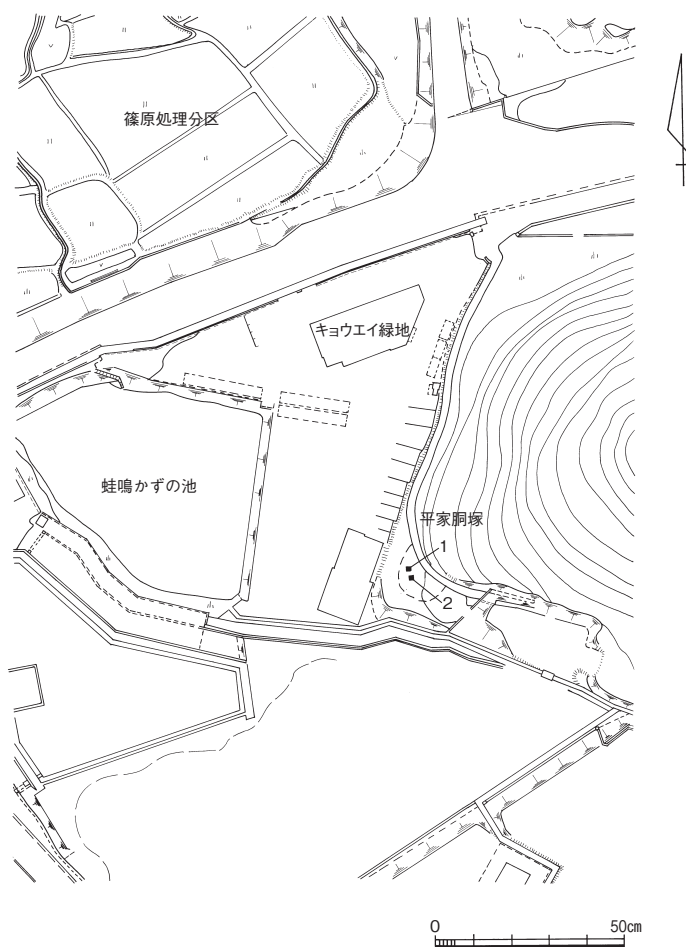
供養墓



設置看板



阿弥陀石仏



平宗盛・清宗の墓伝承地